

紙つて

ペストという言葉が使われるようになったのは、十九世紀末にペスト菌が特定されてからのことである。

十四、十五世紀には「疫病」と呼ばれていた。「黒死病」は十六世紀の歴史家によって初めて使われ、黒は「恐るべき」を意味していた。

一三四八年を中心に欧州で大流行したペストの死亡率は、近年の研究によると45〜60%といわれている。

フィレンツェ大司教はトスカーナで初めて隔離病棟を設立し、ヴェネツィアやピサ、ジェノヴァ等の海港都市では四十日間の検疫の義務が課された。古代ギリシャの医学者ヒポクラテスが四十日目を治癒の日としたことが理由で、quarantine（検

ペストとルネサンス

武田 好

疫の語源はイタリア語の「約四十」quarantinaである。（『イタリアの黒死病関係史料集』『地獄と煉獄のはざま』より）

キリスト教社会に生きる当時の人々は、ペストを「神罰」と解釈した。下層民の死亡率は高く労働力は不足した。貸し付けた金は回収不能となり経済不況に陥った。人々の富への執着心は薄れ、持ち主がいなくなった財産は公共事業や慈善事業に投資された。教会や宗教的文化財への寄進が急増した。

金では得られない真の尊敬を求めて教育、学問が大切にされる。絶望や恐怖、不安の中で、それでもさらに高度な意識の発展を求めた人々の努力の反映、それがルネサンス文化である。

（静岡文化芸術大教授）

2020.6.20

2020.6.20

中日新聞（夕刊）P.1